

はじめに

今、東京の中心で、もっとも活性化する街として話題にのぼる地域、それは「丸の内」です。再開発の「丸ビル」に続いて、東京駅丸の内北口に完成した「丸の内オアゾ」はオフィス・ホテル・商業から成る複合施設です。

じつは、この「丸の内」という地域は、江戸時代には江戸城東側の御曲輪内の地域で、それは「大手前」と「西の丸下」、そして「大名小路」と通称された大名藩邸が建ち並んでいたところでした。そこで暮らす人びと、生活とはどのようなものであったのでしょうか。

一方、時代はかわって明治期。皇居に面して展開するこの地域には、当初、官公庁や軍施設などが置かれていました。やがて、「一丁ロンドン」に代表される数々の近代建築が建ちはじめ、最先端の街並みを形成していきます。丸の内を彩った建物、街並みはどのような姿を見せていたのでしょうか。

こうした「江戸城と丸の内」について、都市歴史研究室ではオムニバス講座を「えどはくカルチャー」で展開してきました。その後シンポジウム「江戸城と丸の内」を開催いたしました。

そして今回この『東京都江戸東京博物館研究報告第12号』では、これらの成果を受けて「江戸城と丸の内」の特集を組みました。「江戸城と丸の内」をめぐるシンポジウムと「えどはくカルチャー」の内容を報告するとともに、関連する論文なども合わせて収載いたしました。ご活用いただければ幸いです。

江戸東京博物館 都市歴史研究室